

ムギ赤かび病（病原菌：*Gibberella zeae*、*Fusarium avenaceum* など）

○ 被害と発生生態

本病は糸状菌による病害で、ムギ類の最重要病害である。収量や品質における直接的な被害だけではなく、病原菌の産生するかび毒が生産物に基準以上含まれると市場の流通が規制されるため、経済的な損失が大きい（農産物検査規格規定における被害粒の混入上限値：0.0%）。

主に穂に発生するが、その他、茎、葉身などにも発生する。乳熟期ころから、穂の一部あるいは全部が褐色になり、穎の合わせ目に桃色のかびが見られる。病原菌は、ムギの被害稈のほかイネ科植物の残渣（稲わら、稲刈株など）で越冬し、春期になるとこれらの植物残渣上に多数の子のう胞子が形成され、ムギの穂に空気伝染する。感染した穂には桃色の分生胞子が形成され、二次伝染源となる。種子伝染や土壌伝染もする。

感染の最適温度は20～27℃で、主な感染期間である開花期から乳熟期にかけて降雨が多いと発生が多くなる。全ての麦種に発生するが、品種によって抵抗性の程度が異なる。

○ 防除法

（ア）耕種・物理的防除

- ・イネ、ムギなどの植物残渣が一次伝染源となるので、耕起の際にすき込む。
- ・窒素肥料の多用と施用時期の遅延を避ける。

（イ）薬剤防除

- ・以下に示した3回の防除を基本とする。
- ・開花期が最も感染しやすいので、防除時期が遅れないようにする。
- ・平成20年に実施した耐性菌検定では、トップジンM剤などベンゾイミダゾール系薬剤の耐性菌は認められなかった。本剤は耐性菌発生のおそれがあるため、DMI剤（チルト）などの薬剤と交互に散布する。

防除時期

1回目：コムギ	：開花始め（穂揃期後2～3日頃）
ハダカムギ	：開花始め（穂揃期～穂揃期後2日頃）
二条オオムギ	：穂揃期後10日頃（開花しないため（開花受粉））
2回目：第1回目の防除から7～10日後	
3回目：第2回目の防除から7～10日後	

表 麦類の赤かび病抵抗性

種類	品種	抵抗性
コムギ	ふくさやか	やや弱
コムギ	せときらら	強
ハダカムギ	トヨノカゼ	やや弱
二条オオムギ	サチホゴールデン	やや強



コムギ赤かび病